

被服の最ゆとり量について

日本女大家政 ○藤村 淑子 大野 静枝

目的 肢物を素材として被服設計がなされる場合には、ゆるみが必要条件となる。被服構造的実用上のゆるみは人間の日常の動作や運動により生ずる体型や体表面の変化に過不足なくあたえられた最ゆとり量といふことになる。被服製作時のゆるみの一例をみると文化式では原型の胸囲は10cm、ドレックス式では8cmがとられており、一般に胸囲のゆとり量は10±2cmが多い。これらのゆるみの設定は着脱の難易さから求められた量だといわれ、人間の種々な動作を勘案して検討されたものではないようである。そこで人間の動作を忠実にとらえる方法を考察し運動による面積変化量を測定し、その結果とレブリカ法から得られた静止時体表面積、文化式原型との比較から最ゆとり量を検討した。

方法 体表面の変化量を忠実にまた簡便に把握するためとし、伸縮性PSを着用させ未延伸状態にて、測定箇所長軸長さ方向一体前面27部位、後面18部位、上肢11部位計56部位、水平位周長さ方向一体幹前面18部位、後面20部位、下肢部12部位計50部位の運動による最大変化量を測定した。また、これから体表面の変化を面積変化量といふものとし各測定部位に正中線に向かう斜めの測定線をとり、各々の三角形から面積変化量を求めた。面積測定は体幹部後面、上下肢計53部位である。被験者は女子学生3名である。

結果 各長軸、水平位周方向に面積変化率の大、小の出現は被験者3名にほぼ共通してあらわれる部位が確認できた。レブリカ法による面積、運動による面積、文化式原型の面積の差から、文化式にはゆとり量が未だ不十分であることがわかった。また運動に対するゆとりは、よき方向よりいたる方向にはるであることが確認できた。